「リスク」を伝えるということ

さくらまちハートケアクリニック　荒井　秀樹　医師

昔は災害と言えば、たまに起こる地震や交通事故程度で、こういうものは科学技術が進歩するにつれてコントロールできるようになり、結果的に災害は減るだろう、などと子供心に思っていたような気がするのですが、現実は違っていました。最近では、自然災害では地震だけではなくゲリラ豪雨のようなものまで現れていますし、事故でも単なる交通事故だけではなく、原発事故や情報漏洩と言ったより複雑なものが出てきており、年々「リスク」が増えていると不安に感じているのは皆さんも一緒ではないでしょうか？そういう中で、隙を狙うかのように起こった、コロナパンデミックやロシアのウクライナ侵攻。以前は想定することがなかった、或いは敢えて考えないようにしていた、感染症や戦争のリスクまで私たちは考えなくてはいけない時代に生きているのだと思い知らされました。

「リスク」とは、好ましくないことが起こる可能性のことですから、できることなら考えたくない、目を背けたいような話題です。リスクはゼロにすれば安心と言いたいところですが、残念なことにゼロリスクはあり得ないことです。リスクが複雑になり、避けて通れなくなっているとしたら、正しい情報を手にして、それをもとに自ら考えて、自分の行動を自分で選択していくことが私たちひとりひとりに必要になっているのでしょう。

「〇〇の安全性や危険性についてお話ししましょう」というのが、リスクコミュニケーションです。私たち医療者は、医療の面での専門家ですが、医療の中にも当然リスクは潜んでいます。薬を飲めば薬のリスク、手術をすれば手術のリスク、検査をすれば検査のリスク、などです。各々の専門職が自分の専門に関わるリスクを一般の方に伝える場合、単に知識や統計を正確かつ論理的に説明することで十分ではありません。「わかりやすく」伝える必要があります。専門家は、専門知識と経験から、「安全である」ことを強調しがちです。

一方一般の方は、メディアやソーシャルネットワークなどで得た情報から不安を感じている事柄が印象に残るので、「危険である」ことに目が行きやすい傾向があります。理論的に「安全である」といくら言われても心に響きません。安心できないと人の行動は変わりませんから、「安心である」と思えるように伝えることが理想的ですが、少なくとも「リスクがあっても、過度に不安になったり、怖がらなくてもいいんだな」と、聞き手が最終的に思ってもらうように伝えなければ意味がありません。「わかりやすく」と言うのは、言い換えれば「相手目線で」「相手がわかる言葉で」「相手の気持ちや価値観を認めつつ」という事です。

コロナワクチンや子宮頸がんワクチンの低い接種率が話題になっています。ワクチンを

する、しないは個人の自由という意見もありますが、多くの医療者は「した方がいいのに」と思っているのではないでしょうか？リスクを過大に捉えすぎてワクチンはしたくないという人にワクチン接種を勧めるとき、どんなリスクコミュニケーションをしたらいいのか、今だからこそ、専門職としての私たち医療者はひとりひとりシュミレーションしておく必要があるのではないでしょうか？